

---

1999

彩彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

1999

### 【Zマーク】

Z2406D

### 【作者名】

彩彦

### 【あらすじ】

世の中には、本当に頭のいいヤツなんかいない。本当は、みんな馬鹿なんだ。

## 僕と彼女の出会い方

あの女に遭ったのは、未だノストラダムスが信じていた七月。

僕はまだ幼かったが、もう十本の指では年を表せない程だ。

その日、僕は家出少年で、公園のブランコに座つて途方に暮れる・  
・真似をしていた。

なにせ家出である。今まで経験したどんなイベントよりもスリルがあつたと思う。

そんな訳で、悲しそうな顔をしながら、心は冒険にでる勇者のように高揚していた。

キイ、キイ、キイ

ブランコが揺れる音がして、隣を見ると制服を着た女が居た。

ソイツはこう言つたんだ。

「ねえ、恐怖の大王、信じてる?」

見知らぬ美人に話かけられて、僕はあせつた。

「信じてる訳ないだろ。ガキっぽい。

アンタ誰だよ。」

「私はね、信じてるんだ。

隕石でも、ウイルスでも、核ミサイルでも、  
何かが世界を壊してくれるって。」

それが、ソイツとかわした最初の会話だった。

これは僕の前から居なくなつた女の話だ。

僕とソイツの、不思議で、可笑しくて、悲しい話。

こうして、僕の初恋は始まつた。

## 第一話 ニューオーダー

この物語は少年「平野 優一」にどつては思い出したくも無い。恥ずかしい話であろう。

物語が始まる時、優一は人の気持ちが解らないヤツだつた。自分がイジメられない為なら平氣で人を見捨てるような。そのくせ学校の成績は良く、周りから「クール」だとか「器用なヤツ」などと言われていた。

表には出さないが、それは少年のプライドが関係していたと思つ。「かつこ悪い」奴等になりたく無いと、内心ビクビクしていたのだ。それも仕方の無い事だろう。少年はまだやつと両手で年を表せなくなつたばかり。

平たく言えば十一歳。小学六年生だった。

早熟した知性を持つていると自負していた。  
世の中には退屈な事しかない。

言葉ではなく、心にそんな概念が溢れていた。  
しかし、そんな少年も恋に目覚める。

神長真美という女は不思議な少女だつた。

中学一年生という青春の只中で、一人ノストラダムスが世界を終わらしてくれる。などと、まあ

ある意味では夢見がちとも言える思考を持つていた。

どこか地に足がついていないというか、今の時代ならばソッコーで引きこもりやニートなんかのお仲間いりを果たしそうである。優一は別に年上で美人だからといって惚れてしまつような子供では無かつた。

なんというか、似ていたのである。二人は。

しかし悲しい事に、真美は恋愛感情など抱いていなかつた。

なにしる「逃げ場所」の一つとして優一を選んだのだ。  
自分にとつて居心地のいい、敵が居ない場所として。

早い話、誰でも良かつたのだと思つ。

それは、一人のどうしようもない、悲しい相違点だった。

それでも、夏が来ると優一は思い出す。

ノストラダムスのこと。

駄菓子屋の奥にある黒い扉。

暖かい彼女の手。

1999年の夏は、彼にとつて忘れられない夏になったのだ。

街は関東の地方都市にあつた。

まだ人の手が行き届いてない土手や、田、畑。その中に細々とした道路や、店なんかがある。

河なんか澄みきつており、放課後の少年が遊んでいる姿を見ることができる。

家出をして、彼女と出合つた優一はそれからもちよくちよく彼女と会つようになつていた。

別段約束なんかしなくとも、公園に行けば彼女は居た。

そこで一人は今自分の中でも流行つてゐる事だつたり、新しく出たゲームの話なんかをした。

ブランコに揺れながらお互ひの事を少しずつ喋り、一人は打ち解けていつた。

思えば、優一はこの時気づくべきだつたのだ。

真美が学校の話をしない事に。

優一が楽しそうに学校の話をするとき、少し表情が曇る事に。

小学六年生には酷な願いかもしれないが、そうすれば違う未来もあつたはずである

その日 - - -。

真美は相変わらず不思議な感じだつた。

二人とも学校の帰りで、真美は制服のままでブランコをこいでいた。

放課後 というのは変な時間である。

学校という呪縛から開放されたモラトリアムの囚人達が、一番自分

らしく生きる時間。

そこには大人達の目は無い。よつて少年少女は好き勝手に自分らしく生きる。

そして家に帰り、また大人の監視下に置かれる。

少年や少女達にはもつと放課後が必要だとと思う。

そこには、成長するはずの何かがあるから。

はつきり言つて放課後を宿題で埋め尽くすのはいかがなものか。

そんな感じの事を考えながら、優一はせつせと漢字を書いていた。

セミが鳴き始める公園で、そんな優一を見て真美はたずねる。

「ゆーくん、なんで家でやんないの？」

ちなみに優一はこの呼び方が気にいらなかつた。

いかにも子供扱いな感じだからだ。

「怒られると、かつこ悪いから。」

少し嫌な言い方になつてしまつたと思った。

「いやいやでやつても頭に入らないよ。

だからアタシは宿題はやんないんだ。」

彼女は気になった様子も無くホツとする。

「真美はオキラクだね。そんなんじゃほーとつむすめになっちゃうよ。」

「放蕩娘かあ。ゆーくんは難しい言葉知つてるね。」

言つてから、優一は放蕩娘つてのがどんな娘か知らないのが解つた。

「ゆーくんは勉強が好き？ アタシよりも？」

遊ばれている事に気づいて、少し腹がたつた。

「どつちも嫌いだよ！」

優一は家で勉強するのが苦手だった。

母はいわゆる教育が好きで、成績優秀な優一を誇りに思っていた。

平野さんの坊ちゃんは噂通り優秀ですね。

そんな事を近所のおばさんが言つたのを聞くと吐き気がした。

だから、家で勉強してまた母が調子に乗るのが嫌だった。

「オマエ、なんでいつも此処にくるんだよ。」

心の中で考えている事と違うことを喋る。

少年にはありがちのことである。

「好きだから。」

優一はどきりとした心と、顔を隠すことができない。

まあここで澄ました顔で通せる十一歳はいないだろう。

「す、好きって何がだよ？」

一拍の後、返つて来た言葉は、優一が望んだものでは無かった。

「ここがだよ。アタシは此処が好き。

人に忘れられたみたいなプラン」も  
すべりたくてすべれない滑り台も  
雑草が生えてきている芝生も。」

真美というのはこういう女の子だった。

優一の気持ちに気づいても、自分のペースで生きる。

優一をまるで公園の付属品みたいに扱う。

そう、逃げ場所は期待してはいけないのだ。  
彼女の本当の場所は違う所にあるのだから。

しかし、優一の期待を見透かしている真美は、その後そっと手を握りながら言つた。

「遊ぼうか。」

それだけで、優一は宿題を放り投げてしまつ。

心も真美の暖かい手に掴まれたみたいに。

逆の手に握つていた鉛筆は漢字の海に転がる。

しうがないななんて心で言い訳をしながら、嬉しかつた。

「手なんか握るなよ。恥ずかしい。」

少し照れくさくて、優一は手を振り解こうとする。

しかし思つたよりも強く握られており、優一はあきらめる。少し痛いと感じるほど、真美は力強く優一の手を握っていた。

「アタシね、こういう風に握らないと不安なんだ。

優一君が苦しいって解つても、こんなふうにしか握れないんだ。変かな？」優一君と呼ばれた事に驚きながら、少年は謎を追及しながら答えるのだ。

なんで？と聞いた瞬間に、この放課後が終わつてしまつ、そんな予感があった。

そんなことよりも握つた手の感触の方が優一にとつては一大事だったのだ。

ひとしきり遊んだ後、優一と真美はよく駄菓子屋に足を運んだ。

「万年堂」という名前で少しカビ臭い匂いがする。

いつたいいつからあるのか解らないプラモデルやらベーゴマなんかが溢れていた。

ソコにある「チエリオ」というラムネが優一のお気に入りだつた。おばさんに一本渡すと、気さくな笑顔で言つのだ。

「彼女の分もかい？やさしいねえ。」

まるでヒッヒッヒと語尾についてもいにような気さくな・・・いや失礼、邪悪な笑みだ。

この駄菓子屋の店番をしているばーさんはよく解らん人だつた。

優一は小学三年生の時から通つてゐるのだが、いまだにこのおばさんのが何を考えているのか解らない。

昔、優一のクラスメイトがここで万引きをした事があるのだが、優一がその時の事を聞こうとするとそのクラスメイトは決まって俺は何も見てないし、聞いてない！……と、首を力の限り振り回しながら答えるのだ。触らぬ神に祟り無し。

そんな訳で、二人は今日も表のベンチでのんびりとチエリオを飲ん

で  
い  
た。

優一がチラリと横目で真美の事を見ると、真美はビンを傾けて飲み干す寸前だった。

白い首筋にするりと水滴が落ちる。

夏に入りたての日差しがぼろぼろの軒下に落ちる。

田のはじには白い雲が流れていき、ゆるい風で彼女の髪がなびくちょうど一枚の絵画を見ているような感じだ。優一はそう思った。こんな時間が續けばいい。

そんな時だつた。

遠くから歌が聞こえてくる。

語が外れていふの、セイナに口に感づいてくる。

ラジオ体操の歌を歌いながらソイツはやつてきた。

かぶり、

制服を着ているので中学生以上だろう。

そして優一達の座つているベンチの前で後輪でドリフトをかます。すまあまあ。なんて音がしてソイツは盛大にコケた。

「ケるだけなら良かつた。

しかし、慣性の法則はソイツの身体を吹っ飛ばした。吹っ飛んだ身体は真っ直ぐに優一に向かっている。

優一は全く動けなかつた。今自分の目の前で起きてることに反応ができない。

叫んだと同時にソイツの膝がミヅオチにささり、優一は気を失う。

「ふう。フィールドのおかげで助かったぜ。」

ソイツは何事も無かつたかのように立ち上がると、ヘルメットを脱ぎ捨てる。

中から出てきたのは少女だった。

猫を思わせる釣り眼、ふつくらとした唇、暴れている髪の毛。色々と問題はあるが、まあ美少女と言えるだろう。

「あなたなんなんですか？いきなり飛び出してきて。」

真美は少し語氣を荒くしていた。

まるで大切なオモチャを壊された子供のよう。

「おつかしーなあ？やっぱりこここのギアの比率が・・・」

ぶつぶつと言いながら自転車をいじる女を見て真美は思つた。

コイツには日本語が通じない。

しかし、真美は直感的に気づいてしまつた。

この女は只者ではないと。

女の目は非常に貪欲的なものや、強い意志をもつており、コイツは何者にも束縛されない力を持っている。

ちょっとカッコイイかもと思つた。

真美は深いレベルでは自分は道徳や規律、規則とは無縁だと感じていたが、目の前の女はレベルが違いすぎる。枠を飛び越えて一周したような女だつた。

ため息を吐く真美

一 気絶している優一

ノリノリな女

ここから、物語は回り始める。

世界は少年の気持ちを巻き込んで、どつかに飛んでいく。オキラクなセミがみーんと鳴いて、夏の到来を感じる

1999年の夏は始まってしまった。  
ノストラダムスは、まだこない。  
た。

## 第一話 ハロー・オーダー（後書き）

始めまして、彩彦と申します。

やつとじはじまつた1999！

遅筆なので一週間に一度程の更新となります。

コメントして頂くとやる気が出で少し更新が早くなるやもしけませ  
ん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2406d/>

---

1999

2010年10月21日23時49分発行